

選外佳作

どこかしら重粒子線治療に頼ってるわが弱気心もおしむべし

(一〇) 福岡

松原龍一郎

明け遣らぬ空の匂いを纏うバラ 海の向こうに娘は嫁ぐ

(一二) 埼玉

加藤 健司

筆圧の薄き荷札に雨にじむ独りでくらす従姉の便り

(八四) 広島

井上 愛

あのかどを小走りに来た友を待ついつも遅れてもう永遠に来ず

(一〇二) 広島

中田 敏恵

右の手に白杖にぎり左手を吾の肩におく兄と歩みき

(一一二) 広島

住田久美子

土砂降りの雨をくぐりて濡れそぼつ傘を持ってとう母に背きて

(一一四) 山口

益賀 睦代

嫁に行く介護士の手のやわらかきいつか子をだき来ると思ひつ

(一五三) 山口

中村美重子

ひそやかに池の在り処を示すのかどんぐり落ちて水を切るおと

(一六七) 山口

藤井 重行

- 蚊遣りの香くぐもる部屋の翳りきてナンプレ初段まだ解き切れず (一八二) 岡山 長谷川多佳子
- 読み捨てにしろと言われて読み捨てにできるわけない歌評いたたく (一八九) 広島 楯田 順子
- サバンナに雨降る真昼大谷はかつとぼしてる雲抜くごとく (一九六) 千葉 小田 優子
- 七歳のことばの海に溺れをりきのふのきのふあしたのあした (二一〇) 広島 下垣内和子
- 長く長く姉と話せる電話口 お茶を注ぐ音、ごくり飲む音 (二三九) 山口 倉谷 節子
- 「ねころ寺へ」の標の石に手を触れて修羅をしづめぬ四国巡礼 (二五三) 福岡 岸原 修
- 娘の薦める脳活ドリルを朝食後さらつてゐます まだだいぢやうぶ (二六三) 山口 木村 桂子
- 早苗田を見ればふる里のあの場所に苗代苺が熟れてはいぬか (二八二) 山口 向井 桂子
- スニーカーの小舟のやうな中敷に足を載せたり今日はどこまで (二八四) 広島 鳥山 順子
- 告白を詠う男子生徒いて教室の空気ぐわつと動く (三二五) 山口 石井久美子
- 人けなき一両列車に乗り込めば夕日に座席みな陣取らる (三五九) 広島 勝部 律子

飲み干して牛乳の髭たくわえるくりくり頭 首の細かり

(三七六) 広島

木下 陽子

手花火に興じしあの日の写真には娘一家も夫もまだ居る

(三八四) 山口

正木 紀子

春の陽に表であそぶ子等の声みたりよたり三人四人の声音聞き分く

(三九二) 広島

山本 友栄

芋づるの植え付け終りと書かれたりたった二行の亡父の日記は

(四二五) 山口

山中 弘子

長靴より田靴の方が脱ぎにくく電話のベルにまた間に合はぬ

(四五八) 山口

原田 雅子

五歳児の覚えしことは「うくらいな」「ミサイル」「せんそう」「ぶーちん」「ろしあ

(四八六) 広島

井山 修子

街なかに空地を見ては思ひたりさても此処には何がありしか

(四九三) 広島

小坂 修

売却した家のバラが満開のちと後の住人写すみびとメール送りき

(五二五) 千葉

小守谷うた子

こまこまと暑さ対策のメモ置きて娘こが風のごと帰りゆきたり

(五五八) 山口

兼子 春枝

問われれば翡翠の碧と答うべし西城川の流れは清し

(五六八) 広島

松園 和子

言われたいから生きてみる「北欧の夜空の色が似合う人」って

(五七二) 広島

木野 葛紗